

松江は女性パワーで溢れていた

—『嗚呼 満蒙開拓団』自主上映会に参加して—

大類 善啓

『嗚呼 満蒙開拓団』は、東京の岩波ホールで好評裡に上映を終えた後も、個性的なプログラム編成で活動する各地の映画館で次々に上映され、また今でも自主上映会で盛んに取り上げられている。その自主上映会のひとつが2月14日（日）松江で行われ、主催団体から演出の羽田澄子さんに講演の要請があった。が今一つ、羽田さんのお身体が本調子ではない。まして地方へ遠出するとなると難しいということで、代わりに出掛けることになった。

松江というと、一度行ったことはあるが、散策した記憶もない。小泉八雲が松江を愛し住んでいたというイメージがあるぐらいだ。高校時代の世界史の先生が大学を出た直後、東京にいるよりも田舎に出ようと、最初に松江で先生になったことを思い出した。在学の2年生以降その先生と親しく言葉を交わしたが、松江についてついぞ話したことは一度もない。ただ、まだ親しく話す以前の1年の時、急遽代講で初めて教室に現れた先生は、自己紹介として松江に赴任したことを我々に話した。それが今でも印象に残っている。ああこの先生は、夏目漱石の『坊ちゃん』をイメージして、松江を選んだのではないか、と今でも勝手に想像している。

松江か。のどかな城下町だ。そんなイメージだけが先行していた。

ベアテが映画を運んできた！

実は、13日の夜に、ある会合に出ようと思っていた。それを終えて行くとなると夜行になる。これはしんどいな、着いても早朝である。どこで一休みするかが問題だ。もう一つは、新幹線の最終便に乗り、京都の叔母の家に一泊し、翌朝岡山経由で松江に行くという方法だ。しかしだんだん期日が近づいてくると、これもかなりしんどいだろうなと思うようになった。羽田澄子さんの代役など務まらないことはわかっているが、大事な役を万全の体調で努めたい。そう思って前日に行く旨、主催団体である『ベアテの贈りものを届ける会』の加藤尚子さんに伝えた。

『ベアテの会』とは、映画『ベアテの贈りもの』を契機に発足したグループだ。世界的なピアニストを父にもつベアテ・シロタ・ゴードンさんは1946年、現在の日本国憲法の草案に携わり、男女同権条項を盛り込むことに全力を尽くした女性である。映画が公開された当時、ぜひ見に行かねばと思いながら、実は見逃してしまった映画だ。

映画は、日本国憲法の男女平等の条文がどういう経緯で生まれたのか、生みの母でもあ

るベアテ・シロタさん一家の苦難の歴史、そして憲法第24条を受け取った日本女性の思いを描いたものである。この映画を見た加藤さんたちは、「ベアテの思い」を更に多くの人たちに伝えていこうと会を発足されたとのことだった。

また加藤さんは、羽田澄子さんの前作『終りよければすべてよし』の自主上映会を主宰された方でもある。彼女は「羽田さんの作品なら安心して観られる」というほどの羽田ファンなのだ。その加藤さんに、前日の夕方5時半ごろ松江に着くようにする旨メールを入れたところ、翌朝、「5時半頃に着くというなら、5時から交流会が始まる。それにお出になっていただければ」という電話である。いろいろな人たちが集まるらしい。前日のイベントなのだろう。事前に松江の方々にお会いするのも悪くないと思って承諾した。

「竹島問題」は、対立ではなく対話で！

13日、松江のホテルにチェックインした後、渡部通恵さんが自分の車を運転して迎えに来てくださった。車中、渡部さんは「松江という町はかつての藩の影響もあり、みなさん自分の意見を言わない人が多いんですよ」とのことだった。「何かやろうという女性はみんな松江の外から来た人がほとんどで、私も岡山出身ですよ」という。

あとでわかったことだが、渡部さんは、アフガニスタンに小学校を作る活動や、慰安婦問題、朝鮮・韓国・日本から世界へ平和を、というシンポジウムの開催など、実に様々な活動を積極的に展開されている女性である。

車の中から、「竹島を返せ」という看板が見える。「これじゃ対立を煽るだけです。対立より対話ですよ」と話す渡部さんだ。全くそうだと同感し話すうちに会場へ着く。見回せばほとんどが女性だ。

5時きっかり交流会は始まった。司会を務める添田さんという女性の進行ぶりがまた、プロ級だ。プロ級というより、もしかしたら本当のプロなのかもしれない。

その日は、佐古和枝さんという少壮の考古学者で女性史研究家の講演があったようで、彼女がまず挨拶され、その次に私も一言挨拶することになった。

私が座るように指定されたテーブルは、加藤さんや佐古さん、右隣の女性は貴谷麻以さんという松江市議会議員、彼女も松江ではなく京都出身だという。あとで同じテーブルの女性たちと名刺を交換したが、民主党の角ともこさんや白石恵子さんなど民主党の島根県議会議員という、みなさん錚々たる女性メンバーである。もしかしたら、松江の女性パワーのリーダーは全員、ここに集合しているんじゃないか。そう思うほどの雰囲気だ。

驚くほど勉強熱心な松江の人々

14日のその朝、加藤さんと渡部さんがホテルに迎えに来てくださった。講演前の時間を少しでも松江を見る時間をと、配慮してくださったのだ。今朝の午前10時から始まる第1回目の上映では、180人入るホールがいっぱい。別に60人を入れる部屋を設けて

上映会が始まったらしく、加藤さんも渡部さんも苦勞した甲斐があったようで、良かったと声も弾んでいる。

確かに松江の方々是非常に熱心で、事前に「映画を観る前に聴いておきたいお話」という題で、浜田孝志さんという高校の先生を講師に呼んで勉強会も開催していたのだ。

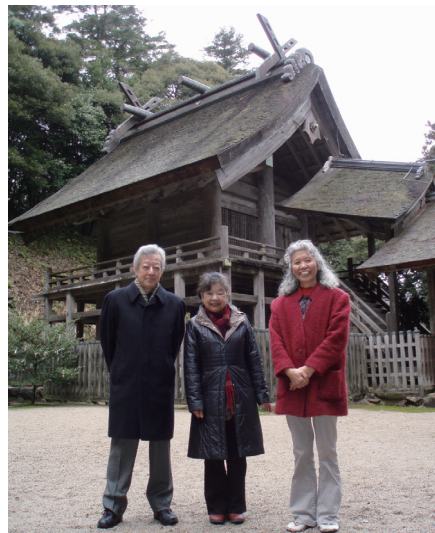
浜田さんは、1986年から10年間、大東高校で歴史教師として勤務。同校にあった体験者の手記を授業の資料に用いていたが、近所に体験者がいることを聞き、調査を始められた。そして12人から話を聞き4年余りかけて調査し、『満州に連れ出された女学生～島根県立大東高等女学校皇国農村学徒報告隊の記録～』（かもがわ出版）を出版された方である。

そればかりではない。この自主上映会後は、松江市在住の歴史研究家の安川毅さんを迎えて、「～この地に この時代を生きて～」と題して「鑑賞後講座」を2月の28日に開催された。本当に熱心な方々だと頭が下がる。

その熱心さは、後述するアンケート集の作成にも表れている。

さて、渡部さんの車に乗って市内をひと巡りだ。松江城を囲むお堀は今、水郷の柳川を真似て小船でゆっくりと見て回れるようになっている。その川下り風景を左に、小泉八雲が住んでいた屋敷を右に眺めながら、着いた先が神霊神社だった。とても古い神社だという。確かにしんとした空気が漂い、ちゃらちゃらした感じから最も遠い雰囲気だ。車を降りて階段を登り、神社に向かう。

昔、丹波の元伊勢神社を訪れたことがある。毎年総理が参詣する伊勢神宮のルーツはここだ！ というだけあって、小さいながらも、床しさと、確かに神は降臨したと思うような厳かな気配と雰囲気を感じたが、同じような印象を神霊神社から受けて、元伊勢神社を思い出した。



神霊神社で。右から大類、加藤、渡部

会場はいっぱいだった

12時半から1時間が、講演である。演題は「方正日本人公墓の意味するものとは」とした。進行役は田中朝子さんだ。これもあとで知ったことだが、田中さんは、島根県という立地状況を十分に踏まえて近隣の平和を願い、「ロシア理解講座」を担っておられる方である。

講演を聞かれる方々は、午前中に映画を見られた方や、この講演の後すぐ映画を見られ

る方である。それ故、映画で描かれ紹介されていることは極力触れずに話そうと思った。そこで、方正友好交流の会の前史、またその後の経過状況や反響、日本人公墓の維持・管理実現に向かった経緯、今後の課題などを話した。ここでは、その中の一つだけ、あるエピソードを改めて紹介しておこう。

日中国交回復にこぎつけた、いわば井戸を掘った一人である岡崎嘉平太さんの話である。国交回復時に、中国政府が日本から賠償金を放棄する決断をした際、東北地方（旧満洲）の官民から、「残留孤児たちを養育した費用だけは賠償とは別に補償すべきだ」という強い声が、周恩来まで押し寄せた。しかし、周恩来はその強い陳情を抑えたという話である。当時、この話を周恩来から聞かされた岡崎嘉平太さんは、「ずっとこの話だけは今まで誰にも話さなかったことだが」と言って、石井貫一さんと牧野八郎さん（共に当会の前身「方正地区支援交流の会」の会長と事務局長だった方）に語られた秘話である。周恩来は、賠償はもちろん、東北（旧満州）からの強い要求を、たぶん涙を吞んで敢えて抑え、いかに憎悪と怨みの連鎖を断ち切ろうとしたかということである。

その時々の方々の声を聞くのが為政者の務めである。しかし、その要求が理に適っているように、それ以上に、長い目で見た場合の高度な政治判断の方が、ヒューマンな精神を呼び覚まし、恒久平和に繋がる道であると考えた場合、断固としてそれを貫徹することがいかに重要であることか。このエピソードはそれを語っている。

講演のあと、時間がもうなかったが、司会の田中さんから、何か質問はないかと会場を見回せば、若い青年が立ち上がった。私が南野千恵子・元法務大臣の公墓参拝など、当時の自民党政権の有力政治家に会うたびに、公墓の存在や維持・管理について話したことを踏まえてであろう、「新たな民主党政権に何か働きかけないのか」という質問だった。

これには、小沢一郎氏が訪中団を組織した時、参加した姫井由美子議員が北京で中国政府幹部に会った際、公墓建立感謝のメッセージを記したチラシを配ったことに触れた。

小沢一郎氏には会えなかったが、姫井議員を通して、中国政府に感謝のメッセージを発すべきだと、関係者を含めて我々が進言したことを話した。

ともあれ、松江での自主上映会は成功裡に終わったようである。それを証明するかのように、終わったあと、「ベルテの会」の現在の代表である吉野康子さんから、当日配布されたアンケートなどをまとめた15頁ほどの冊子が送られてきた。

その中のいくつかを、全文ではないが要約してご紹介しておこうと思い、1頁ほど書き出し始めたのだが、なかなか興味深いメッセージも多く、称賛の声ばかりでなく、冷めた眼もあり、いっそ全文を掲載した方が松江の自主上映会をより深く紹介できると思い、いっさい手を加えずに紹介することにした。なお、名前と住所を明記した方にはその掲載の有無を確認した。ぜひ、松江の人々の思いを、くみとっていただきたいと思う。

（おおい・よしひろ：方正友好交流の会事務局長）